2018. 12

やさしい囲碁史

第24回

昭和初期の囲碁界と戦争

古作　登（大阪商業大アミューズメント産業研究所主任研究員）

昭和初期の棋界は激動の時期であった。1938（昭和13）年に二十一世本因坊秀哉名人の引退碁が打たれ、翌年に初のタイトル戦、本因坊戦が始まり、関山利一六段（当時）が第１期本因坊に。一方で日本を取り巻く国際情勢は明るいものではなかった。

日中戦争が泥沼化した1941（昭和16）年「棋道報国会」設立。囲碁将棋を通じて主に軍需産業に関わる国内の工場を慰問、満州などにも足を運ぶ。日米開戦後も囲碁界は活動していたが戦局が厳しくなると棋士の徴兵も増えていった。木谷実、高川格、坂田栄男、島村利博、梶原武雄、杉内雅男ら棋界を背負う面々も例外ではなく大手合は残った者で続けられたが、1945（昭和20）年５月25日の空襲で東京・溜池の日本棋院が全焼、ついに対局も不可能となった。

だが、棋界の頂点を争う第３期本因坊戦は続けられ、瀬越憲作八段（当時）の疎開先、広島市で７月23日に第１局（３日制）が打たれた。対局者は本因坊昭宇（橋本宇太郎）と挑戦者の岩本薫七段。初戦を挑戦者が制した後、第２局は関係者の進言により空襲に備えて郊外に場所を移し８月４日から行われた。

橋本宇太郎九段
（『橋本宇太郎の世界』から）

対局３日目の６日昼、広島に原爆が投下される。10キロ離れていた対局場も爆風で窓ガラスが割れたが、対局者の命に別状はなく、部屋を掃除して終局まで打ち、本因坊昭宇の勝ち。第３局が打たれたのは終戦後の11月で翌年４月には大手合も再開される。

焼け野原となった日本の国土とともに囲碁界も急速に復興へ歩み始めた。

2019. 1

やさしい囲碁史

第25回

国宝に描かれた囲碁の対局

古作　登（大阪商業大アミューズメント産業研究所主任研究員）

囲碁に関連した国宝といえば、真っ先に奈良・正倉院に収められている碁盤「木画紫檀棊局」が挙げられるが、関東地方にも囲碁関連の国宝が存在することはあまり知られていない。

筆者は囲碁の歴史を研究する有志の集まり「囲碁史会」のメンバーと2018年夏、埼玉県熊谷市の仏教寺院「妻沼聖天山（めぬましょうでんざん）」を訪問した。

門をくぐって奥に進むと本殿「歓喜院聖天堂」で、奥殿には色彩豊かな彫刻が施されている。1735（享保20）年から1760（宝暦10）年にかけて再建されたもので、徳川家康を祭る日光東照宮（1617年創建）の改築に参加した職人や子孫が関わったといわれ埼玉日光とも呼ばれる。龍や鳳凰といった伝説上の生き物や孔子、釈迦、老子といった聖人などさまざまな図柄が描かれており、2003年から2011年までの大規模な修復を経て、2012年に国宝に指定された。

特筆すべきはその中に七福神の布袋、恵比寿、大黒天が碁盤を囲む彫刻があることで、そこに描かれている局面は本因坊道策（1645～1702）と地元・武州熊谷出身の熊谷本碩（生没年不詳）の棋譜からとったもの。ただし奥殿は国宝に認定されるまで修復が繰り返されており、当初はこの盤面でなかったかもしれない。

奥殿に施された対局の彫刻

本碩は道策門下の「五弟子」と呼ばれた中の一人。早世したが元禄年間に道策と８局の棋譜があり、３勝４敗１持碁という結果を残し高い才能をうかがわせる。